



Title	ジュバ・アラビア語の現在 : 社会言語学的諸相および表記の発達から見るその動態
Author(s)	仲尾, 周一郎
Citation	アラブ・イスラム研究. 2011, 9, p. 79-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105935
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジュバ・アラビア語の現在 — 社会言語学的諸相および表記の発達から見るその動態 —

仲 尾 周 一 郎*

The Present Situation of Juba Arabic — Its Sociolinguistic Aspects with Remarks on Developing Notations —

Juba Arabic is an Arabic-based “pidgincreole” (Bakker 2008), and is spoken as a lingua franca mainly in the Equatoria region of Southern Sudan. The speaking population can be estimated to be some millions, from Sudan’s national census 2008 and some refugee language censuses in Egypt (Calvani 2003) and Australia (Centrelink 2006).

The aim of this article is to examine the sociolinguistic aspects of Juba Arabic from the following three points of view. First, I will describe its present sociological functions, as well as Sudan’s interim language policy which was adopted in the 2005 Comprehensive Peace Agreement (CPA). Secondly, I will give an outline of the Juba Arabic varieties (including a contact language spoken in Kakuma refugee camp, and Juba Arabic slang used by present younger generations), and aspects of the creolization/ decreolization process. In addition to this, I will give a short introduction to Arabic-based pidgins/ creoles of other Arab nations and also other Arabic varieties spoken in Sudan. Thirdly, in presenting some Juba Arabic documents, I will examine its current writing conventions. In this paper, I will consider the orthography designed by Watson & Ola (1985) and Smith & Ama (1985) to have a semi-official feature, as similar orthographies are used in some other documents published by missionaries. This orthography is characterized by the usage of doubled vowels for an accent, and a hyphen in order to avoid obscurities of syllable boundary. However, the Juba Arabic speakers themselves tend to skip the prosodical spellings; also the stability and/ or accuracy of the spelling differs from speaker to speaker.

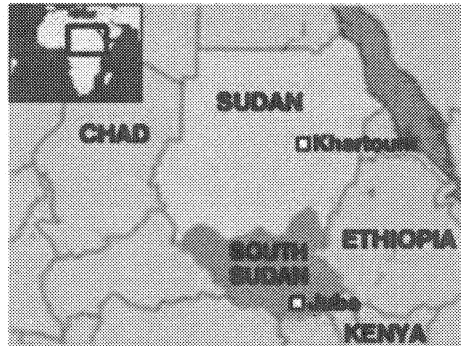
* 京都大学大学院文学研究科 博士前期課程

1. はじめに

ジュバ・アラビア語 (Juba Arabic, 略号 JA) はアラビア語とアフリカ諸語の言語接触により発生した特殊なアラビア語変種であり、南部スーダンの首都ジュバ市を中心とするエクアトリア地域でおそらく数百万人によって話される地域共通語である。

本稿では第二次スーダン内戦 (1983–2005) が終結し、スーダン共和国からの南部スーダンの独立を問う国民投票 (2011 年) 前夜の今、JA がみせる動態的展開について考察する。第2節では JA の社会言語学的諸相に関する概略的な記述を行い、第3節では近年発達しつつあるラテン文字による JA の表記習慣について分析する。

図1：スーダン (www.bbc.co.uk)

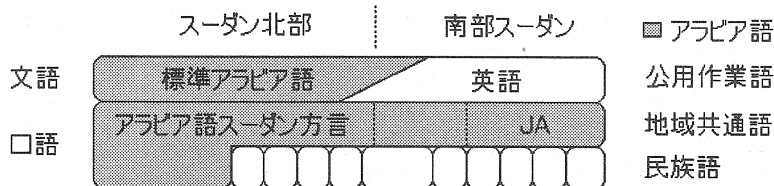


2. ジュバ・アラビア語の社会言語学的諸相

2. 1. スーダンにおける多言語使用と「アラビア語」

スーダンは、民族ごとに 100 以上の言語が話されているといわれ¹⁾、水平的多言語使用 (horizontal multilingualism) 社会であるといえる。しかし、全ての言語が同等の社会的機能をもっているわけではなく、単純化すれば図2のような機能分担の階層をもつ。

図2：スーダンにおける多言語使用



現在、スーダンの公用作業語 (実質的には公用語) は「アラビア語と英語」とされているが、その威信は北部・南部でやや異なる。地域共通語 (異民族間の媒介言語) は、法規上全く言及されていないが、北部では口語アラビア語スーダン方言、南部では JA およびスーダン方言と JA の中間的な変種が話されている。図2右端のように民族語・地域共通語・公用作業語 (実質的には「公用語」) が階層を成す多言語使用状況は、垂直的多言語使用 (vertical multilingualism) といわれ、多くのアフリカ諸国に見られる。これに対し図2左端のようにアラブ人社会において行われる (アラビア語の) 文語変種と口語変種の併用は、二言語変種併用 (diglossia) といわれ、アラブ諸国で広く見られる。

1) 1956 年に行われた第1回国勢調査では 113 言語が数えられている。なお、*Ethnologue* (Lewis 2009) は 134 言語を数えているが、これは幾つかの民族語を細分化して数え、ロマ語やティグリニャ語等の移民の言語をも含んでいる数字である。なお、このうち南部スーダンで話される民族語はナイル=サハラ大語族のうち東ナイル諸語・西ナイル諸語・スルマ諸語・中央スーダン諸語、ニジェール=コンゴ大語族のうちウバンギ諸語等に属する約 50 言語である。

2. 1. 1. スーダンにおける言語政策

スーダンにおける言語政策は高度に政治化されてきた問題として知られる。南北スーダンに於いてはイギリス植民地統治終結以降、大きく二度の内戦(1955–1972, 1983–2005)が勃発したが、基本的に北部のアラブ＝イスラーム覇権のもつ、政治的、経済的、宗教的、そして言語的優位に対する南部の抵抗という性格をもっていた。

南部スーダンにおいて初めて明文的に席次計画(status planning)が示されたのは、1928年にイギリス植民地政府によって開かれたレジャフ言語会議(Rejaf Language Conference)であった。この会議の結果、南部スーダンにおける公用語は英語とされ、6つの民族語(シルク語・ディンカ語・ヌエル語・バリ語・ラトゥカ語・ザンデ語)が「グループ言語」として初等教育に導入された。この決定は、当時南部スーダン(エクアトリア)で地域共通語として話されていたモンガラ語またはビンバン・アラビア語と呼ばれるアラビア語ピジン(2.2.)を排斥し、それに代わる地域共通語として英語や諸民族語を導入することで、北部による南部の「アラブ化」を阻止することを目的としていたと理解されている(Tucker 1934: 29, Collins 1975: 56, 栗本 2002: 81)。これに対し、植民地統治終結後の言語政策は基本的に南部スーダンにおけるアラビア語の普及を目標としていた。教育言語に関しては政権により様々な政策が採られたが、公用語に限れば1956年のスーダン独立以来2005年の第二次内戦終結まで、アラビア語が唯一の公用語とされてきた²⁾。

2005年に締結された南北間の包括的和平合意(Comprehensive Peace Agreement; CPA)、およびCPAを受けて制定されたスーダン共和国暫定憲法・南部スーダン暫定憲法は、両政府レベルでアラビア語と英語を「公用作業語」としている。また、それぞれの「土着言語」をすべて「国語」としてその使用を奨励することが明記されており、下位国家レベルの政府においてあらゆる国語が公用作業語として使用可能であると記されている³⁾。

スーダン共和国暫定憲法 第8条 (英文版)

1. All indigenous languages of the Sudan are national languages and shall be respected, developed and promoted.
2. Arabic is a widely spoken national language in the Sudan.
3. Arabic, as a major language at the national level and English shall be the official working languages of the national government and the languages of instruction for higher education.
4. In addition to Arabic and English, the legislature of any subnational level of government may adopt any other national language as an additional official working language at its level.
5. There shall be no discrimination against the use of either Arabic or English at any level of government or stage of education.

2) ただし、第一次スーダン内戦終結後、最終的に締結されたアディスアベバ合意(1972)では、アラビア語を公用語(official language)としつつ、英語を南部の主要言語(principal language)とし、土着の言語を促進する旨、記された(Abū Bakr 1975: 14–15)。

3) 実際に、バハル・エル・ジェベル州(現中央エクアトリア州)暫定憲法最終草案では、土着の民族語であるバリ語を公用作業語に加える案が提示された(Murray & Maywald 2006: 1230)。

南部スーダン暫定憲法 第6条 (英文版)

1. All indigenous languages of Southern Sudan are national languages and shall be respected, developed and promoted.
2. English and Arabic shall be the official working languages at the level of the governments of Southern Sudan and the States as well as languages of instruction for higher education.
3. There shall be no discrimination against the use of either English or Arabic at any level of government or stage of education.
4. English, as a major language in Southern Sudan, and Arabic, shall be the official working languages of the governments of Southern Sudan, and the states and the languages of instruction for higher education.
5. In addition to English and Arabic, the legislature of any sub-level of government in Southern Sudan may adopt any other national language as an additional official working language or medium of instruction in schools at its level.
6. The Government of Southern Sudan shall promote the development of a sign language for the benefit of people with special needs.

以上のように、実行力をもちうる社会規範としては、両暫定憲法はほぼ一致しているといえる。しかし、スーダン共和国暫定憲法第8条3節ではアラビア語が「国家レベルでの主要言語」とされているのに対し、南部スーダン暫定憲法第6条4節では英語が「南部スーダンの主要言語」と記述されている。両条文は実質的に強制力をもつというよりも、レジャフ言語会議以来の南部スーダンにおける英語の威信、独立以来のスーダン共和国におけるアラビア語の威信を象徴的に表していると理解できる。

両暫定憲法には問題点も多く存在する。スーダン共和国憲法第8条2節は、アラビア語諸変種の存在を無視しており、具体的にどの変種が「公用作業語」であるかを明示していない。実際にスーダン共和国および南部スーダンで公文書に使用されているのは標準アラビア語であるが、この変種は基本的に口語としての機能をもっていないため、条文間に曖昧性が生じている。また、南部スーダン暫定憲法においても、公用語とされているアラビア語変種が明示されていないため、Web上では英語とJAが南部スーダンの公用語であると誤認されている例も散見される (e.g. Wikipedia “Southern Sudan”)

2. 1. 2. スーダンにおける口語アラビア語変種

JAを含むスーダンにおける多様なアラビア語諸変種の存在は英植民地時代に既に認識されており、当時の記述研究も存在するが、言語政策においてアラビア語非標準変種に公的地位が与えられることはなかった (ただし、例外も存在する cf. 3.3.2.)。

口語アラビア語スーダン方言は、伝統的に中央・東部・西部・北部の下位方言に四別される。中央方言はハルツームで話される変種 (ハルツーム方言) を含むスーダン中央部で話される変種であり、ジャアリーイーン部族の方言である。東部方言は主にシュクリーヤ部族やリファア部族の話す方言であり、クシ系言語であるベジャ語からの基層の影響で基本構成素順がSOVとなっている (その他の方言は基本的にSVO)。西部方言はスーダン中西部のアラブ人遊牧民バグガーラの話す方言であり、チャド・ワダイ

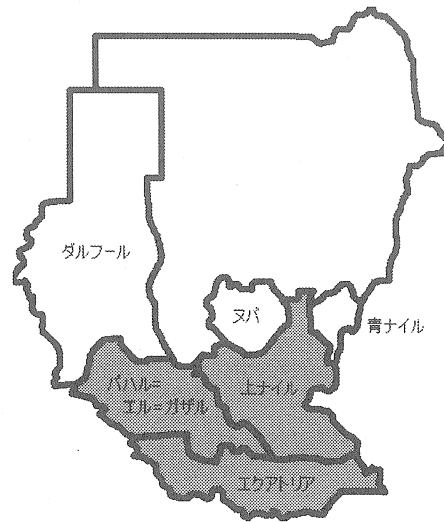
方言と共通する特徴をもつ。北部方言は主にナイル川流域のシャーイギーヤ等の部族が話す方言であり、上エジプト方言と共通する特徴をもつ。更にこれらの諸方言、特に中央方言はそれぞれ下位部族ごとに異なる特徴をもっているとされる (Abu-Manga 2009: 375–376, Miller & Abu-Manga 1992: 13–15)⁴⁾。

また、口語アラビア語諸方言は非アラビア語母語話者である土着民族間、特にダルフル⁵⁾やヌバ山地、青ナイル州などの地域において地域共通語として使用されている (Miller & Abu-Manga 1992: 15, Abu-Manga 2009: 376, Nadel 1947: 3)。非母語話者の話す口語アラビア語変種に関する記述は極めて少ないが、Calvani (2003: 12) はカイロ在住ダルフル難民の話す変種の特徴に、1人称複数代名詞の1人称単数代名詞としての使用、フル語からの語彙・構造借用、定冠詞 *al-* の省略等を挙げている。また、南部スーダンの上ナイル (Upper Nile) 地域やバハル＝エル＝ガザル (Bahr el Ghazal) 地域では部分的に簡略化、再構成されたアラビア語変種が話されているが、その記述研究はほぼ皆無である⁶⁾。

以上の変種に対して、エクアトリア地域で話されている JA は構造上著しい差異をもつ。例文(1)は標準アラビア語 (略号 SA)・ハルツーム方言 (略号 KA)・JA により「私 (女性) はとても忙しかった」を表す文である (いずれも簡略的な IPA 表記、および逐語訳)。

(1)	SA.	(ʾana)	'kun-tu	maʃ'yu:l-at-an	'ḡiddan.
		1SG	繫辞.過去-1SG	忙しい.女性形.対格	とても
	KA.	'ana	'kut-ta	maʃ'yu:l-a	'xal:is.
		1SG	繫辞.過去-1SG	忙しい.女性形	とても
	JA.	ánà	kán	mùsùkùl	sèdíd.
		1SG	過去	忙しい	とても

図3：スーダンの各地域



4) スーダンにおいてハルツーム方言は口語レベルで最も威信をもつ変種であり、Sudanese Colloquial Arabic と称されることも多い。特に近年エジプト・カイロ方言や湾岸方言の影響が顕著である (ibids.)。なお、スーダン方言のアラビア語方言学における系統上の所属としては、伝統的にエジプト・スーダン方言 (チャド・ナイジェリアの諸方言を含む) の下位方言とされている (中野 1988) が、Crewe (1973) はアラビア半島方言との系統関係を示唆している。

5) ダルフルを拠点とするラジオ放送局 Radio Dabanga は標準アラビア語やフル語・ザガワ語・マサリット語に加え、ダルフル・アラビア語 (Darfur Arabic) での放送を行っている。

6) JA と地域共通語のアラビア語との中間的な変種と考えられ、Local Arabic, Bahr el Ghazal Arabic, Wau Arabic, Malakal Arabic のように呼ばれることがある (ただし、ピジンではない)。南部で話される JA とこれらの中間変種の総称として、Southern Arabic, Southern Sudanese Arabic, Simple Arabic 等々の名称もしばしば使用される。ただし、バハル＝エル＝ガザルや上ナイルにおける地域共通語としてのアラビア語変種の地位はエクアトリアと比して低いようである。

SA と KA を比較すると、KA が対格標識 (-an) をもたない点や、わずかな音韻上の差異 (SA. kun-tu vs. KA. kut-ta) が認められるが、繫辞動詞の屈折や文法性等の文法範疇は基本的に共通している。これに対し、JA では音韻的にも大きな違い (SA・KA. ストレスアクセント vs. JA. ピッチアクセント、SA・KA. /j/ vs. JA. /s/, SA・KA. /y/ vs. JA. /k/ など) があり、文法範疇の多くも失われていることから、独立した言語変種であるといえる⁷⁾。

このように、言語接触の結果著しく簡略化、再構成された言語は言語接触研究においてピジン (pidgin) と呼ばれ、典型的には、共通の言語をもたない言語集団間で発生する、限定的なコミュニケーションにのみ用いられる、母語話者がいないなどの特徴をもつ。なお、ピジンが (一定の集団の) 母語として獲得され、構造的発展を遂げたものはクレオール (creole) と呼ばれる。

2. 2. アラビア語系ピジン・クレオール諸語

口語アラビア語変種をベースとして発生したピジンやクレオールは、JA を含め、現在までに 10 種程が報告されているが、発生状況等によって以下のように三別できる⁸⁾。

- (2) I. アラブ地域における外国人出稼ぎ労働者により発生したもの⁹⁾
- II. 文献資料等から、かつて存在したと推定されるもの
- III. 19 世紀以降スーダンを中心に発生し、サハラ南部広域に拡散したもの

近年のアラブ地域における経済発展に伴い、当地域に多数の外国人出稼ぎ労働者が去来しているが、アラブ人雇い主と外国人労働者の間に種々のアラビア語ピジンが発生している。現在までに報告されているものには、湾岸諸国在住のインド・パキスタン系労働者の話すもの (“Gulf Pidgin Arabic”, Smart 1990, Næss 2008)、イラク在住のルーマニア人労働者の話すもの (“Romanian Pidgin Arabic”, Avram 2010)、レバノン在住のスリランカ人家政婦の話すもの (“Pidgin Madam”, Bizri 2005) がある。文献資料に記録されたアラビア語ピジンの例としては、11 世紀のアラビア語文献に記録されているマリディ・アラビア語 (“Maridi Arabic”, Thomason & Elgibali 1986) や 15-16 世紀のイタリア語文献に記録されているアラビア語ピジン (Cortini 1994) が挙げられる。その他、過去にはマダガスカルにもアラビア語ピジンが存在した可能性も指摘されている (Versteegh 2001: 182)。

7) アラブ人と南部スーダン人にはアラビア語観に大きな違いがあることは特筆に値する。アラブ人は文語 (SA) に対して口語アラビア語諸変種 (KA・JA) を峻別するのに対し、一般的に南部スーダン人は、南部スーダンで話されるアラビア語変種に対して北部スーダンで話されるアラビア語 (SA・KA) という対立軸により峻別する傾向が強く、SA と KA の差異には非常に無頓着である。しかし、歴史言語学・言語接触研究の観点からは、SA・KA・JA の差異はラテン語・フランス語・ハイチクレオールの差異と相似しており、それぞれ完全に独立した言語体系として取り扱うことが要請される。なお、簡略な JA 文法の概略としては、Manfredi (2005: 53-216), Miller (2006), Nhial (1975), Bureng (1986), Smith & Ama (2005: 177-195), شول (2005), 仲尾 (2010: 39-48) などがあるが、それぞれの記述は一致しない点も多い。

8) 本節では高階 (1988), Owens (1997) 以降の研究状況を踏まえつつ、典型的なピジン・クレオールと考えられるもののみ挙げている。ただし、部分的な簡略化や再構成が生じたアラビア語変種がリングフランカとして使用されている例は他にも存在する。代表的なものとしては、チャド東部のワダイ地域で話される変種 (Roth 1979)、エチオピアの市場で使用されている変種 (Ferguson 1972)、エリトリアやジブチで使用されている変種 (Simeone-Senelle 2007) 等が知られているが、本稿ではこれらをピジンまたはクレオールとして認めない。

19世紀以降、スーダンを中心とするサハラ南部ではアラビア語ピジンの大規模な発生・拡大を遂げた。1820年代、オスマン＝エジプトがスーダン遠征に際し、ヌバ山地・エクトリア出身の奴隷を徴兵して軍隊を編成した。この軍隊内で発生したビンバシ・アラビア語またはモンガラ語 (Bimbashi Arabic, Mongaltese)¹⁰⁾ と呼ばれるアラビア語ピジンが後に地域共通語としての機能を獲得し発展させ、現在も南部スーダンで使用されているものがジュバ・アラビア語であるといえる。この軍隊が後にイギリス政府によってウガンダやケニアに派遣され土着化した言語集団はヌビ人、その言語はヌビ語 (Nubi/Kinubi) と呼ばれ、現在もウガンダ・ケニアを中心に数万人の話者が存在する (Owens 1977, Heine 1982, Wellens 2003)。19世紀後半にはスーダン人奴隷商、ラービフ・アル＝ズバイルがチャドに侵攻した結果、彼の率いた奴隷兵の話したアラビア語ピジンがチャド地域に伝播し、チャド方言をベースとするピジン、トゥルク語が成立したとされる (Turku, Tosco & Owens 1993)。現在もチャド南西部にアラビア語ピジン (Bongor Arabic, Luffin 2007)、西部にクレオール (Babalia Creole Arabic, Lewis 2009, *Ethnologue*) の存在が報告されている。

2. 3. ジュバ・アラビア語の社会言語学的側面

2. 3. 1. ジュバ・アラビア語の話者人口

JA の社会的機能を論ずる前に、まずはその話者人口について考察したい。

JA の話者人口に関する唯一の報告 *Ethnologue* (Lewis 2009) は第一言語話者 2 万人・第二言語話者 4.4 万人としているが、この数字は少なくとも現状からは支持できない。第 5 回スーダン共和国国勢調査¹¹⁾ (2008) の結果、南部スーダンの総人口は約 826 万人 (ジュバ市の人口は約 37 万人) とされた。全ての南部人が JA を話す訳ではないにしても、話者人口が増加していないとすると JA 話者は南部人の 1% に満たないことになる。

これに対し、カイロにおける難民の言語状況について概説している Calvani (2003: 13) は、その独自の調査によって在カイロ南部スーダン難民の 60% が JA を話すと報告しており、Centrelink (2008: 6) は在オーストラリア・スーダン出身者の 51.2% が JA を話すと報告している。南部スーダン国内の JA 使用者率に関する調査として、Siddiek (2010: 86) は Al-Faki (2007, 引用情報不完全のため詳細は不明) のデータを引用し、南部スーダン人のうち、英語話者は 8% であるのに対し、75% 以上が JA 話者であると報告している。

これらのデータ (南部スーダン人コミュニティの 50~75% が JA を話す) を南部スーダンの総人口に換算すれば、JA は数百万人の話者を擁するであろうことが推測できる。この数字はパプアニューギニアの英語系ピジンであるトク・ピシンや、カメルーンの英

9) なお、中東地域における類例として、イスラエル在住の外国人労働者によって話されるピジン化されたヘブライ語の存在も報告されている (Elhanan-Granik 2001)。

10) 記録に Thorburn (1925) や Jenkins (1908/9) があり、後者は Kaye & Tosco (1993) により分析されているが、JA やヌビ語と異なる特徴がみられる。また、このアラビア語ピジンの発生に関しては、時期をほぼ同じくして行われた象牙・奴隷貿易の影響も示唆されている (Mahmud 1983: 15) が、確実なことは分かっていない。なお Bimbashi はトルコ語で「少佐」を意味し、Mongalla はエクトリア州の旧名かつ当時の州都名である (栗本 2002: 87)。

11) スーダン全体の人口については、この国勢調査では 3915 万人、国連発表 (2009) では 4227 万 2 千人とされている。第 5 回国勢調査の結果は南部スーダン自治政府によって受理されておらず、南部スーダンの総人口に 1000 万人以上を見積もる報告も存在する。

語系ピジンの推定話者人口 (共に数百万人程度) と近似しており、次節以降で見る JA の社会的機能もこれらの言語とほぼ共通していることから、この推定はある程度の妥当性をもつと考えられる。ただし、上記のデータは JA と中間的変種 (2.1.2.) を十分区別している保証はなく、ジュバやエクアトリアで話される、いわば「典型的」な JA の話者人口は不明である¹²⁾。

2. 3. 2. ジュバ・アラビア語の社会的機能

かつて、JA は DeCamp (1977: 4) の記述に見られるように「ほとんどの集団にとって母語ではなく、相互に理解できない言語集団間の交易等において補助的な共通語として使用される、誰もが認めるであろう典型的なピジン」であったと考えられる¹³⁾。しかし、現在 JA は大規模な話者人口を獲得し、文化的・公共的機能をも獲得しつつある。

Catherine Miller は、その一連の著作で JA が行政や政治家の演説、ローカルな裁判、キリスト教教会における説教、放送、劇、歌謡等で使用されていることを報告している (Miller 2003, 2006, 2007, 2009)¹⁴⁾。さらに、Miller (2003) は、スーダン共和国の首都・ハルツームにおける南部スーダン出身の国内避難民コミュニティでは、すでにアラビア語ハルツーム方言が獲得されている (2.3.3.) にも関わらず、JA が当コミュニティ内で行われる演劇や歌謡に使用されている事実から、JA がハルツームにおいて南部スーダンのアイデンティティを表出する象徴的な機能さえ獲得していると主張している¹⁵⁾。

一方で、現在かつての「交易言語」としての機能は、ジュバ市では一部英語にとって代わられつつある。ジュバ市は現在、国内外からの帰還民やスーダン北部出身者のほか、アジア・アフリカ諸国 (管見の限り、ウガンダ・ケニア・エチオピア・エリトリア・ソマリア・タンザニア・ナイジェリア・エジプト・シリア・インド・ネパール・中国・タイ等) 出身の商人や労働者や経営者、さらに各国の NGO・GO 関係者等々を数多く擁する国際都市となっており、現実的には英語がナショナルリティを越えて使用される共通語となりつつある¹⁶⁾。

2. 3. 3. ジュバ・アラビア語の動態的展開

前節では JA が多くの話者人口を獲得し、社会的機能が変化しつつあることを述べたが、そうした状況下で、言語構造自体も変化を被りつつある。さらに、スーダンは内戦の結果、数百万人といわれる南部スーダン出身国内避難民、数十万人といわれる海外難

12) Borland & Mphande (2006: 35) はオーストラリア・ビクトリア州で行われた種々の統計より JA 話者を 500 人、スーダン方言話者を 1900 人と推定している。しかし、元となっている統計データが情報元ごとに大きく異なっていることから、信頼性に欠けると考えられる。

13) ただし、Tucker (1934) はビンバン・アラビア語について「(ある地域では) 警察からの親切を受けるために最も良く評価されている言語としての威信をも」っており (p. 29)、ギリシャ人商人によっても話されていた (p. 36) ことを報告している。このような報告から、植民地時代においても単なる土着民族間の「補助的な交易言語」以上の地位をもっていたことが伺える。

14) ただし、行政や政治家の演説における使用に関しては、普通不特定多数の「一般民衆」に対する場面 (選挙活動等) に限られる。裁判や教会での説教には民族語も使用されている (Miller 2007, 2009)。ラジオ放送に関しては、Radio Juba, Radio Omdurman, Miraya FM, Sudan Radio Service 等、様々な放送局が JA による放送を行ってきた経緯があり、現在は南部の国営テレビ放送 South Sudan TV においても JA は使用されている。また、スーダン国内外を問わず、JA による歌謡は少なからず存在するが、その多数はキリスト教歌謡のようである。

民を生んでおり、こうした状況が JA の動態的展開をより複雑なものにしている。以下では、JA のジュバ市におけるクレオール化、いわゆるアラブ地域在住の難民に見られる脱クレオール化などについての先行研究や、JA の民族方言や社会方言について述べる。

1. クレオール化

JA は、既にクレオール化（≡母語化）していると報告が存在する。Mahmud (1983: 53, ff.) は自身のアンケート調査に基づき、ジュバ市の小学生の多くが JA を母語として申告したと報告している¹⁷⁾。これらの事例からジュバ市の幼年層にとって JA がドミナントであることが分かるが、筆者の調査¹⁸⁾では生え抜きの若年層 JA 話者 M 氏が「小さい頃は民族語が話せなかったが、小学校頃から段々わかるようになり、セカンダリースクールで大体話せるようになった」と語っており、加齢と共に民族語が遅れて獲得されている可能性が高い。

また、別種のクレオール化として、栗本 (2002: 88) は「南部スーダンのジュバをはじめとする都市の「マラキア」と呼ばれる商業地区には、ジュバ・アラビア語を母語とする「脱部族化」した人々が住んでいる。(中略)もともとの言語・文化的ルーツは喪失し、生活様式はアラブ化している。宗教的にもムスリムが多い。」と報告している¹⁹⁾。

15) ただし、飛内 (2009) はハルツーム方言や JA はあくまでコミュニケーション手段であり、民族語が南部人のアイデンティティの拠り所となっていることを報告している。このように南部人のアイデンティティは重層的であり、Miller (2003) の事例から単純に一般化することは不適切である。しかし、多言語社会においてピジンが植民地主義に対するアイデンティティの象徴となり、ある種の国民統合に成功することはメラネシア社会において確認されている（豊田 2000）。栗本 (2002: 89-90) はむしろ積極的に JA が南部人自身によって「われわれの言語」と認識されることによって、JA の潜在的な可能性を開拓することができると主張している。

16) ただし、長期間ジュバに居住し、日常的に南部スーダン人との交流をもつ外国人（主に商人や建設・自動車整備等に従事する非アラビア語話者）はある程度の JA 運用能力をもつ。なお、スーダン北部やエジプト・シリア出身のアラビア語話者は各自の母方言を話す場合が多い。JA とハルツーム方言は文法構造上大きく異なるが、語彙面ではかなりの程度の相通性をもつようである。また、現在ジュバには相当数のウガンダ出身のヌビ人も居住・再帰化しているが、彼らは JA を獲得しており、ヌビ語とは峻別されている（筆者の調査、註 18）。

17) Boone & Watson (1996: 63), Bureng (1986: 71-72) も同様の報告をしている。

18) 2008-2010 年度科学研究費基盤研究 (B) 「アフリカ諸語における統語構造と声調」代表：梶茂樹（京都大学）（研究課題番号 20320059）による研究費補助を受け、筆者が 2009 年 8-9 月、2010 年 8-9 月の計 2 ヶ月間ジュバにて行った調査に基づく。調査対象はバリ人男性 1 名（現在 33 歳）、テネット人男性複数名（現在 20-40 代）である。以下「筆者の調査」と表記する。

19) マラキア (JA. Melekiya < JA. méleki 非戦闘員) とは本来、軍隊を退役した元ヌビ人兵士 (cf. 2.1.) が入植した国有地であった (Johnson 1989: 80)。ムスリムが多く居住するのはこうした歴史的経緯を反映していると考えられる。同様の報告は Bureng (1986: 71) にもみられる。ただし、現在はアラブ化していない無宗教者のストリートチルドレン等も多い（筆者の調査）。

ピジン・クレオール諸語の内、話者の大多数にとっては地域共通語、一部の話者にとっては母語として獲得されているものは、Mühlhäusler (1986: 11) 等に代表される伝統的なピジン・クレオール研究ではピジンからクレオールへの発達段階であると捉えられ、「拡張ピジン (expanded pidgin/ extended pidgin)」と呼ばれている。これに対して Bakker (2008) はピジンともクレオールとも異なる接触言語の一つのあり方であると捉え、このような変種を「ピジンクレオール (pidgincreole)²⁰⁾」と名付けている。JA はその比較的安定した社会的機能や母語化の状況から、「ピジンクレオール」であると言える。

II. 脱クレオール化

南北内戦・ダルフル紛争等の結果、スーダン国内には数百万人ともいわれる避難民、エジプト・カイロにも数万人規模の難民が存在しているといわれる。このような、いわゆるアラブ地域に移住した南部人の話す JA は、様々な点で変化を被りつつある。Miller & Abu-Manga (1992), Mugaddam (2006), 飛内 (2009) はハルツーム在住の南部スーダン難民について、Manfredi (2005), Calvani (2003) はカイロ在住の南部スーダン難民についてその言語状況を報告しているが、何れも南部スーダン人コミュニティにおいてアラビア語（特にハルツーム方言）の影響が強く、若年層ではハルツーム方言自体を獲得している話者も多いことが報告されている。このように本来的にはピジンやクレオールを話していた話者が、そのピジン・クレオールの元となった言語を（段階的に）獲得する過程は、言語接触研究では一般的に「脱クレオール化 (de-creolization)」と呼ばれる現象である。

さらに、Mahmud (1979) がジュバにて採集したテキストに主語人称接頭辞 (ya-, ta-) が獲得されている例が見つかるように、ジュバ市でも脱クレオール化が生じつつあるといわれる (Versteegh 1993: 73-74)²¹⁾。実際、ハルツーム在住経験（避難民・進学等）のある南部スーダン人のジュバへの帰還やジュバにおけるアラビア語教育等により、ハルツーム方言や標準アラビア語は、ジュバにおいてもある程度強い影響力をもっている。

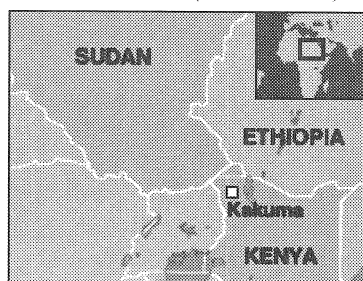
III. カクマ難民キャンプにおける言語接触

南部スーダン難民はアラブ地域に限らず、近隣のアフリカ諸国（エチオピア・ケニア・ウガンダ）にも多く居住しており、新たな言語接触が生じる場合がある。

ケニア北西部に位置するカクマ (Kakuma) には、南部スーダン難民がその大多数を占める難民キャンプ、カクマ難民キャンプが存在するが、当地域における土着民族であるトゥルカナ人と南部スーダン難民の間に交易が発生し、スワヒリ語やある種の接触言語が交易言語として使用されている (Ohta 2005: 325)。

太田至氏は 2000 年にトゥルカナ人の話す交易

図 4：カクマ (www.bbc.co.uk)



20) Bakker (2008: 131) は「ピジンクレオール」を“A pidgincreole is a former pidgin that has become the main language of a speech community and / or a mother tongue for some of its speakers.”と定義し、「交易以外にも文化的使用をもつ」等の特徴を認めており、母語化の程度や社会的機能を重視した術語である。

21) ただし、管見の限りこの現象はジュバ市においては現時点では広く見られるものではなく、標準アラビア語またはハルツーム方言からの影響はふつう語彙借用に限られるようである。

言語の語彙・表現を収集しているが、このデータを分析すると、JA 起源と判断できる語彙約 19 例、ディンカ語起源の語彙約 27 例および数詞を見いだすことができた（起源不明の語彙は約 8 例）。トゥルカナ人はこの交易言語を「難民キャンプ語 (*Nga-Dinkae*)²²⁾」と呼んでいるが、その実際は JA とディンカ語をベースに新たに創出されたピジンであるといえそうである。

IV. 民族方言

JA が民族により異なる特徴をもつことは先行研究でしばしば言及されている (Nhial 1975, Bureng 1986) が、具体的な特徴は十分に調査されていない。筆者の調査においては特徴的な音声実現上の変異の具体例として、以下のようなものが観察されている。

(3) ディンカ語話者	/z/ [q], /s/ [ʃ]	zòl [qô:l] 「人」, sùkun [ʃúkùn] 「暑い」
バリ語話者	/ʃ/ [p]	safir [sàpɪr] 「大使」
ザンデ語話者	/r/ [ʁ]	kartùm [kàsítùmù] 「ハルツーム」
ラトゥカ語話者	/k/ [x]	lakín [laxín] 「しかし」 (表記法は 3.1 参照)

語彙体系にもまた、民族語の影響が見られる。例としてバリ語（東エクアトリア州のルオ系言語）話者の話す JA にはバリ語からの借用 (dwar 「狩猟」 < バリ語) や翻訳借用 (adána ta séjera 「木の葉 (adána 耳)」 jéna ta séjera 「木の実 (jéna 子供)」) が見られる。ただし、少数のバリ語（中央エクアトリア州の有力な東ナイル系言語）起源の語彙 (bángírí 「頬」 jéte 「ササゲの葉」等) はあらゆる民族方言に一般的に見られ、話者自身によって「JA の語彙」と認識されており、バリ語起源であると自覚している話者も少なからず存在する（ただし、第 2 話者としてバリ語の運用能力をもつ話者はまれである）。なお、現時点では文法（形態・統語論）における母民族語からの影響による変異は確認されていない。

V. ジュバ市における若年層スラングと世代差

ジュバ市在住の若年層には特徴的なスラングが存在している。筆者の調査によると、このスラングの特徴は、①民族語や外国語からの借用（バリ語 > jèk 「男」、スワヒリ語 > bángi 「マリファナ」 pómbe 「酒」、リンガラ語 > motéma 「ガールフレンド」、ヒンディ語 > larki 「女の子」、英語 > tóp 「最高」）、②特殊な音韻の特徴をもつ短縮語²³⁾ (iši 「20 < JA. iširín」、meri 「ビール < JA. merisa」 sono 「サンドイッチ < JA. sindowiš」、simo 「タバコ < 英語 smoke」、③無意味接尾辞 -e (bet-ê 「家 < JA. bêt」 ašar-ê 「10 < JA. ášara」)、④意味の変化 (hadid 「自動車 < JA. 鉄」、batál 「とても < JA. 悪い」) の 4 点に集約できる。Miller (2004) は自身が 1980 年代に行った調査によりジュバ市の若年層によって使用されるスラングを記述しているが、過去約 30 年間で大幅に語彙が変化した結果、現在は Miller (2004) に記録されている語彙・表現の多くは使用されていない（40 代以上の話者からは、少数の語彙が再確認できたが、「古い言葉だ」とのコメントが得られた）。

22) トゥルカナ語で「難民キャンプ (*Ngi-Dinkae*) の言語」を指す。ディンカ人 (*Dinka*) は南部スーダン、カクマ難民キャンプいずれにおいても最大の民族である。トゥルカナ人は南部スーダン難民にはその他の様々な民族が含まれていることを認識しつつ、難民キャンプを「ディンカ人の土地 (*Ngi-Dinkae*)」と呼んでいる（太田至氏との個人談話）。

スラングとは若干性格が異なるが、世代により語彙・文法が異なることがある（老年層 *tába* vs. 若年層 *sijára* 「タバコ」、老年層 *jubutália* vs. 若年層 *mustěšfa* 「病院」、老年層 *watwât* vs. 若年層 *lókúlúli* 「コウモリ」、老年層 *faráša* vs. 若年層 *kapáparât* 「蝶」）。基本的に若年層が使用する語彙はハルツーム方言または民族語からの新たな借用である。文法的要素に関しても所有代名詞 (*taí* 「私の」) や命令法複数形接尾辞 (*ásuma-kum* または *ásma-takum* 「聞け pl.」) に対し、若年層ではハルツーム方言的な形式も現れる (*hagí* 「私の < KA. *hag'gí*」 *ásma-u* 「聞け pl. < KA. *'asmaŋ-u*」)。幼年層にも特有の語彙形式が見られる (*tetē* 「這い這い」 *nyanyá* 「食べ物 JA. *ákil*」 *bebên* 「ミルク JA. *lében*」)。

VI. 教会におけるジュバ・アラビア語

Miller (2009: 390–391) はエクアトリアの教会における説教 (1970–80 年代初頭の調査) に JA が使用される際、聖書に現れる特定の概念を表す語彙「聖霊」「天使」「洗礼」「説教する」等がハルツーム方言から借用されていることや、当時の若年層の JA 話者が「教会での JA は古い [JA の] 語彙を反映している」と認識していたことを報告している。

筆者の調査からも、インフォーマント諸氏より「教会でのアラビア語には難しいアラビア語 (= 標準アラビア語またはハルツーム方言) の語彙が多い」との認識が得られた。また、ハルツーム等で教育を受けた牧師や神父はジュバ市においてもハルツーム方言で説教を行うなど、教会におけるアラビア語変種は日常のそれとは若干乖離している²⁴⁾。ただし、ハルツーム方言や標準アラビア語からの語彙・文法借用は政治・文化・産業など様々な場面に於いて広く行われ、宗教的場面に限られているわけではない。

3. ジュバ・アラビア語の表記の発達

JA は基本的には話し言葉であり、文字によって表記されることは少ない。しかしながら、ジュバの街を観察すると、薬局に張られている保健啓蒙ポスター、建造物の壁面、町を走るトラックやバスの車体、T シャツのプリント、カセットテープのカバー等にラ

図 5・6: ジュバ市における JA の表記例 (ジュバ市, 2009)²⁵⁾



23) 元となる語の初頭二音節が LL で現れる。また、一般的な名詞複数形接尾辞 -ât に対し、短縮語の複数形ではバリ語起源の名詞複数形接尾辞 -jin が現れる (*mede-jin*, *sondo-jin*)。

24) 特に男性による説教ではこの傾向がかなり顕著である (筆者の調査による)。

25) 上は壁面に書かれた保健啓蒙のスローガンであると思われるが、*kedé nâs tanina géni kwēs* 「我々の人々が良く [健康に] 暮らすように」と読める。左下はモル人の聖歌歌手 Mary Botul のカセットテープ・アルバムであるが、*zékiri rábuna* 「主を心に留めよ」と読める。

テン文字によって表記されている JA を見つけることができる。

さらに、JA を用いて南部スーダン難民支援やキリスト教宣教を目的としたパンフレットが発行されていることや、ミッションナリー系の組織より讃美歌集が出版されていることは特筆に値する。また、南部スーダン人がインターネット掲示板やメールのやりとりでラテン文字で表記した JA を用いることも多い²⁶⁾。アラビア語系ピジン・クレオール諸語のうち、このように表記の習慣を獲得した言語は他にほぼ類を見ない²⁷⁾。

JA は国家によって公式と認められている正書法をもたない。しかし、JA の外国人向け入門書 Watson & Ola (1985, 2007) および辞書 Smith & Ama (1985, 2005) はラテン文字による正書法を設定している。これに類似した正書法がミッションナリー系の組織によって出版されたヨハネ福音書 (Revival Movement Association, undated) および讃美歌集 (Scripture Union 1998) にも採用されていることから、半公式的な正書法と呼ぶうる。

以上の出版物は何れも非 JA 話者の手が加わったものであると考えられる。JA 話者自身によって表記されたテキストも、一般的には図 5・6 で示したようにラテン文字で表記されているが、表記の正確さやプロソディ表記等の点において差異が認められる。以下、3.1. では JA の音韻を概観し、3.2. ではこれらの表記を具体的なテキストをもとに分析し、3.3. でこの表記が発生、普及した過程について考察する。

3. 1. ジュバ・アラビア語の音韻

現在の JA の表記を分析する前に、その音韻について論じておく必要がある。2.3.3. 節で見たように、JA は脱クレオール化や民族方言、世代等により非常に多様な変異をもつ。特に音韻に関しては一個人方言内でも大きな揺れが見られ、確実な音素目録を記述することは困難である。こうした変異の多様性は JA に限らず、ピジン・クレオールに広く見られ、その音韻・正書法を論じる際大きな問題となる (千田 2006: 277-280)。

以下、音声表記を [], 音韻表記を // によって示し、文字表記には記号を付さない。他の研究者の表記を筆者の音韻表記にエンコードしたものは /// にて示す。

3. 1. 1. 分節音目録

本稿では暫定的に JA の音素目録として (4) の分節音を認めるが、(5) のような音韻上の自由変異²⁸⁾ (ある程度環境に依存する) が広く見られ、特定の語について唯一の音韻形式を認定することは事実上不可能である。表記の際にもこうした音韻上の変異が反映される。

26) アラビア文字による JA 表記もインターネット上での表記等にはわずかに見られるが、圧倒的に少数であり、十分なテキストが得られないため本稿では検討しない。
27) スビ語に関しては、非常にわずかながら出版物が存在するとの情報もある (Lewis 2009)。また、Smart (1990) が新聞の漫画の台詞として書かれた湾岸ピジンアラビア語を分析しているように、他のアラビア語ベースのピジン・クレオールが決して文字化されていない訳ではない。
28) 音声レベルでの自由変異にも様々なものが存在する。具体的には、語末など特定の環境における破裂音の有声・無声の中和は音声上の自由変異と考えるのが自然である (e.g. degig-degik 「穀物粉」)。しかし、音韻上の変異か音声上の変異かを決定することは困難である。

- (4) /i [i~ɪ], e [e~ɛ], a [a~ʌ], o [o~ʊ], u [u~ʊ]/²⁹
 /b, f, m, w, t, d, s, (z), n, l, r [r~r], c [c~ç], j [j~j], (š [ʃ]), y [j], k, g [g], ŋ, (h), (?)/
- (5) /a/~e/, /a/~o/ /mahâl/~mehêl/ 「場所」 /bâtana/~bótona/ 「腹」
 /e/~o/ /tewîl/~towîl/ 「長い」 /wógîf/~wégîf/ 「止まる」
 /e/~i/, /o/~u/ /šîmis/~šémis/ 「太陽」 /šókol/~šúkul/ 「仕事」
 /i/~u/ /šîlu/~šúlu/ 「取る」 /zójîju/~zójûju/ 「娶る」
 /i/~a/, /i/~o/ /rîja/~râja/ 「戻る」 /ligó/~logó/ 「見つける」
 /i/~ø, /u/~ø /tâni/~tân/ 「再び」 /déru/~dér/ 「欲しい」
 /b/~f/, /g/~k/ /kâtibu/~kâtifu/ 「書く」 /átaku/~átagu/ 「笑う」
 /t/~k/, /f/~b/ /degîk/~degît/ 「(穀物の) 粉」 /sáf/~sáb/ 「列」
 /z/~j/, /š/~s/ /zêt/~jêt/ 「油」 /gársâ/~gársâ/ 「駐車」
 /h/~ø, /ʔ/~ø /mehêl/~meêl/ 「場所」 /sâh/~sâ/ 「正しい」 /lá?/~lá/ 「いいえ」

3. 1. 2. 音韻配列・超分節音

音節構造に関しては CCVCC 程度までの複雑な音節を許容する (/kwêš/ 「良い」 /âks/ 「逆」) が、開音節構造を好む傾向があり、母音挿入 (/nâs/~nási/ 「人々」、/usbô/~usubô/ 「週」) や重子音の単子音化 (/béled dé/ [béle dé] 「この国」) などが頻繁に生じる。また、2 音節間で母音が連続する際、渡り音 /w/, /y/ が随意的に挿入される (/úo/~úwo/ 3 人称単数代名詞)。

プロソディに関してはピッチが弁別的³⁰⁾であり、高・低の声調素が声調付与単位 (TBU) である音節に付与される。基本的に 1 音韻語は 1 音節の高声調をもつ。また、音声実現上語末音節では高声調・下降声調の対立がある。本稿の音韻表記では高声調を鋭アクセント記号、下降声調を曲アクセント記号によって表記し、低声調には記号を付さない (/káraba/ 「電気」 /karába/ 「崩壊」 /dóm/ [dom] 「血」 /yôm/ [jom] 「日」)。ただし、一部の民族語系語彙には一音節以上の高声調をもつ語彙 (/dángá/ 「弓」 /kúrikúri/ 「鷺」) や高声調を全くもたない語彙 (/kwete/ 「白ビール」) も見られる。複合語や一部の重複形式などでは、ピッチ変化が生じる (/móyo/ 「水」 /éna/ 「目」 > /moyo-éna/ 「涙」、/sabi/ 「友達」 > /sabi-sabi/ 「友達同士」、/gúna/ 「歌う」 > /gúná-guna/ 「何度も歌う」)。

3. 2. 文字データの分析

以下では、種々の JA テキストに見られる表記の例を挙げて比較する。3.2.1. ではまず、先述の JA 正書法の詳細について述べ、3.2.2. では JA 話者によって表記されたと考えられる出版物、3.2.3. では JA 話者によって表記された非出版物のテキストを分析する。

3. 2. 1. ジュバ・アラビア語の正書法

Watson & Ola (1985: 1-4, 2007: 5-7) の分節音韻記述は /ŋ/ を認めておらず、/š/ は sh と表記される点を除き概ね 3.1.1. で示した筆者のものと一致している。また、プロソディ

29) 話者により、ここでそれぞれ ±ATR の異音としているものが音韻的に弁別されることがある (/súra/ [súra] 「写真」 [súra] 「スピード」) が、本稿では音素として認めない立場をとる。

30) 筆者の調査の結果、ストレスの出現は安定しなかったため、弁別の特徴とは認めていない。

について、「ほとんどの語は語頭音節に強勢をもつが、強勢の位置は予測できない。語頭以外に強勢がある場合、強勢をもつ音節の母音を重ねて表記する」と記述している (e.g. *umbaari* //um'bari// 「昨日」(筆者の調査では /umbári/))。この表記は純粋な母音連続と完全に表記し分けることができないため、曖昧な場合、音節境界にハイフンを挿入すると述べられている (x*taaal*, o *ta-aal* //ta'al// 「おいで」(筆者の調査では /taâl/))。

Smith & Ama (2005: ix–xvii) の正書法は上記のものとおおむね一致しているが、分節音について /ŋ/ を認め、ng と表記する (*ngo-ngo* //ŋo.ŋo// 「白蟻」、*mangga* //m'angga// 「マンガ」(筆者の調査では /ŋoŋo/, /m'angga/))。また、曖昧性回避のハイフンの使用 (*kashab* //kašab// 「材木」*as-haab* //as'hab// 「友人 (pl.)」*auru* //auru// 「痛む」*ba-uuda* //ba'uda// 「蚊」(筆者の調査ではそれぞれ /kášab/, /ashâb/, /áuru/, /baúda/))、および「ストレスアクセント」を表記する重母音表記 (*umbaari* //um'bari// 「昨日」) が見られる。当文献には特殊なピッチ実現をもつ語彙も収録されているが、プロソディは無視されている (*danga* //daŋa// 「弓」*kwete* //kwete// 「白ビール」筆者の調査ではそれぞれ /dángá/, /kwete/))。

(6) は Watson & Ola (2007: 90) からの例文であるが、上記の表記原則から *Alaa* 「神」*munuu* 「誰」*yauu* <焦点化標識> はそれぞれ //a'la/, //mu'nu/, //ya'u/ とエンコードできるが、前者は下降調 /alâ/ をもち、後二者は平板調 /munú/, /yaú/ をもつ。*mahaal bika* 「葬式」、*Kafaara Alaa* 「ご愁傷様です」は //ma'hal 'bika/, //ka'fara a'la/ とエンコードできるが、形態音韻的には複合語化の結果プロソディの変化 (3.1.2.) を被り、/mahal-bíka/, /kafara-alâ/ となっているが、そうしたプロソディ変化は表記に反映されていない。

- (6) J: *Umbaari ana ruwa fi mahaal bika.*
M: *Kafaara le ita. Munuu yauu mutu?*
J: *Kafaara Alaa. Jena ta kal tai yauu mutu.*

- (6)' J: /umbári ána rúwa fi mahal-bíka./
M: /kafára le íta. munú yaú mútu?/
J: /kafara-alâ. jéna ta kál táí yaú mútu./ (筆者の調査に基づく音韻表記)

J: 昨日、私は葬式に行きました。
M: ご愁傷様です。どなたが亡くなったんですか。
J: お心遣い痛み入ります。私の(母方の)おじの子供が亡くなりました。

3. 2. 2. JA 話者による出版物

オーストラリア政府はその移民政策において、一部移民自身の言語による支援を行っている。次に見る *Legal Aid* はニューサウスウェールズ州政府による移民支援機構であり、現在英語を含む 30 言語でパンフレットおよび音声ガイドを出版している。

図 7 : Legal Aid (www.legalaid.nsw.gov.au)


Nina be saadu ita kani ita fi mushukila ma ganun

Juba Arabic (Arabi Juba)

Marhaba takum le musaada ta ganun fi Niyu Saut Wels

Marhaba takum le musaada ta ganun fi Niyu Saut Wels. Nina gi wodi mushawara fi kalam ta ganun majani fi majalat ketir ta ganun, wa fi hallat tannin, nina be agider wodi le ita muhami ashan be wogif fi mahal taki fi mahakama.

1. Marhaba takum le musaada ta ganun fi Niyu Saut Wels.
2. Mushawarat be tanga ta telefun.
3. Fekirat ahi gi wodi gidam take sekeryan.
4. Jahizu gisiin taki le.

- (7) Marhaba takum le musaada ta ganun fi Niyu Saut Wels.
 Nina gi wodi mushawara fi kalam ta ganun majani fi majalat ketir
 ta ganun, wa fi hallat tannin, nina be agider wodi le ita muhami
 ashan be wogif fi mahal taki fi mahakama.

音声ガイド（朗読）ではこのテキストに対し、(7)'のような音韻形式が現れている。

- (7)' /márhaba tákum le musaáda ta ganûn fi (nyú-sáut-wêls)
 nína gí wódi mušuwára fi kalâm ta ganûn majáni fi majalât ketír
 ta ganûn, u fi halât tanîn, nína bi ágider wódi le íta muhámi
 ashan bi wógif fi mahâl táki fi máhkama./

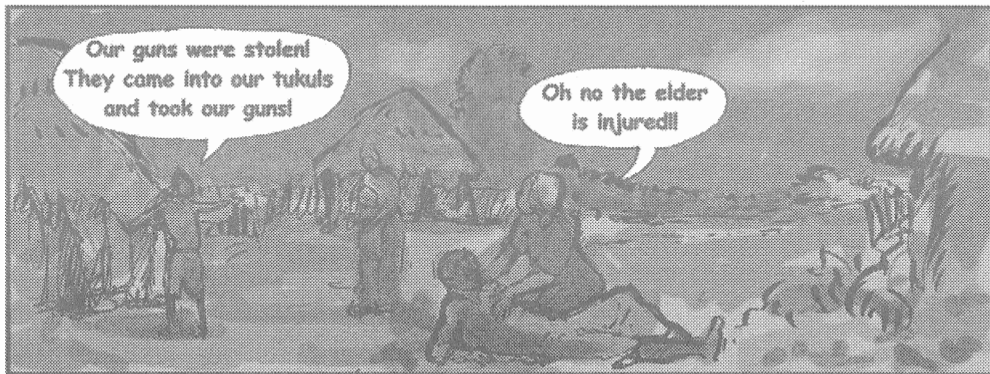
ニューサウスウェールズ法律支援によること。

私たちは様々な分野の法律上の問題について、無料で相談を受け付けています。
 またその他の状況について、私たちは裁判で貴方の代弁をする（あなたの場所に立つ）弁護士をつけることもできます。

この表記を観察すると、3.2.1.の正書法と異なりプロソディに関しては一切表記されていないことが分かる（takum /táku/「貴方」ganun /ganûn/「法律」）。このように、JA 話者自身によって書かれたテキストでは普通、プロソディおよび曖昧性回避のハイフンは表記されず、この点は正書法との重要な相違点であるといえる（cf. 図 5・6）。

次のテキスト (8) は、Bonn International Center for Conversion (2008) 発行の社会啓蒙用コミック、*The Adventure of Simon, A New Beginning in the New Sudan* において、英語に対訳されている JA の表記である。このテキストで用いられている表記は (7) と比して不安定であり、やはりプロソディ・ハイフンに関しては全く表記されていない。(8) の 1 コマ中にも asleha-asleh /ásliha/「武器 (pl.)」のような変異が現れているほか、(8) で現れている oumon /úmon/ <3 人称複数形代名詞> はこのテキストの別箇所では umon, owmon, ouwmon と表記されており、一貫性を欠いている。このように、JA 話者自身によるテキストでは、書き手ごと表記の安定性が大きく異なる。

図 8 : *The Adventure of Simon* (www.bicc.de)



- Seregu asleha tanna! Oumon dakalu fi jwa tanna ouw shelu asleh del.
- Nas al ajusen Kaman aougu fi zaman ta nakama de!!

- (8) Seregu asleha tanna! Oumon dakalu fi jwa tanna ouw shelu asleh del.
Nas al ajusen Kaman aougu fi zaman ta nakama de!!

- (8)' /seregú ášliha tanína! úmon dákalu fi júwa tanína u šílu ášliha dêl.
nâs al ajusîn kamân áugu fi zâman ta nyákama dé!!/
(筆者の調査に基づく音韻表記)

私たちの武器が盗まれた！彼らは私たちの家に入って武器をとったんだ。
老人達もこの襲撃の時にけがをしてしまった！！

3. 2. 3. JA 話者による非出版物

非出版物で JA が表記される場合も、3.2.2. と同様の特徴（プロソディおよび曖昧性回避のハイフンの無表記、書き手による表記の安定性の度合い）が確認できる。(9) はジュバ在住のテネット人（東エクアトリアのスルマ系民族）の筆者の友人 E 氏（1991 年生）からの E メールであるが、(9) の JA 表記は大文字の使用を除けば非常に安定しており、基本的に音韻に忠実に表記されているといえる。

- (9) Sabi tai NAKAO
Salam taki fi Isim Yesua. Shukran shedid ashan ita juwabi Kalamat
al Ana katibu de. Ana Ligo wa Ana agara Kalam al ita katibu le ana de
wa Shukran mara tani ashan ita wori yom al ita bi ja fogo JUBA.
Ana kwes fi JUBA, Keli Rabuna bariku ita wa ahal taki inak fi Japan
wa Shukran Shedid.
Sabi taki min JUBA
- (9)' /sabí taí nakáo
salâm táki fi ísim yesúa. šúkran šedíd ašan íta júwabi kalamât
al ána kátibu dé. ána ligó wa ána ágara kalâm al íta kátibu le ána dé.
wa šúkran mára táni ašan íta wori yôm al íta bi já fôgo júba.

ána kwêš fi júba, kelí rábuna báriku íta wa áhal táki inák fi japân.
wa šúkran šedíd.
sabí táki min júba./ (筆者の調査に基づく音韻表記)

我が友、仲尾 [へ]

イエスの名の下に、こんにちは。私が書いたこと (メール) に返事をして
くれてありがとうございます。貴方が私に書いたこと (メール) を私は見つけて読みました。
そして、貴方がジュバに来る日を教えてくれて、もう一度ありがとうございます。
私はジュバで元気にしています。主がそちら日本での貴方と貴方の家族を
祝福してくれますように。どうもありがとうございます。

ジュバの貴方の友 [より]

次のテキストは筆者がジュバ市在住のテネット人の友人 M 氏 (1986 年生) に依頼して
表記してもらったものであるが、E 氏のものとは比べ表記が不安定であり、やはりプロソ
ディやハイフンの表記は全く見られない。(10) は M 氏が所属する聖歌隊についての手書
きテキストであるが大文字・小文字の区別が曖昧な為、全て小文字で表記した。

(10) では、/e/ と /i/ の表記が一貫しておらず、音韻に忠実な表記 (de /dé/ 「この・これ」,
fi /fi/ 「に・で」) と忠実でない表記 (esem /ísim/ 「名前」 kinisa /kenísa/ 「教会」) が見られる。
また、sahr kmsa /sahar-kámsa/ 「5 月」のような不正確な表記も現れている。

E 氏と M 氏は同じ年齢階梯 (age-grade) に属しているが、表記の安定性の差は E 氏が
英語、M 氏がアラビア語で教育を受けたことに起因していると推測できる。

(10) al esim nada yane semar wa esim de abona willium yau wede li sabab ta
kinisa de. de fi sahr kmsa fi sina de fi kinisa ta gabat. wa adad ta nada
kamsa wa tilitin wa al fi jamaat kmsa sabab.

(10)' /al ísim náda yani simâr wa ísim dé abúna wíliam yaú wodí le sabâb ta
kenísa dé. dé fi sahar-kámsa fi séna dé fi kenísa ta gabât. wa ádad ta náda
kámsa wa teletín wa al fi jamaât kámsa sabâb./ (筆者の調査に基づく音韻表記)

「ナダ」という名は果実という意味で、この名はウィリアム牧師が教会の若者達
(聖歌隊) にくれました。それは今年 5 月のことで、ガバト教会でのことでした。
ナダの [人] 数は 35 人で、[その内] 大学で [学んで] いるのは 5 人です。

3. 3. ジュバ・アラビア語表記の発達過程

3. 3. 1. 民族語の正書法

レジャフ言語会議 (2.1.1.) の結果、選ばれた 6 言語は、後に D. Westermann らにより、
標準アフリカ文字³¹⁾に基づいた正書法が設計・普及された (阿部 2006: 249, 栗本 2002:

31) ラテン文字および国際音声記号 (IPA) をベースとしつつ、アフリカ諸語の音韻を記述することを目的
に考案された文字体系 (Tucker 1971: 618–619, 阿部 2006: 250–254)

81)。独立後、初等教育に於いて2種類の文字を教える不経済性を解消することを名目に、アラビア文字による民族語（ディンカ語・バリ語・ラトゥカ語・ザンデ語・モル語）の正書法改革も試みられた（Abū Bakr 1975: 13, أبو بكر وأبو بكر ٢٠٠٦ : 80-81）が、これは失敗に終わっており、現在公式の出版物では民族語のアラビア文字表記は行われていない³²⁾。

国際 SIL ジュバ事務所では植民地時代に設計された民族語の正書法に倣い、それらの言語を含む南部スーダンの42民族語について（特殊文字を用いた）正書法を設計し、初等教育用の出版物を発行している（SIL 2007）。現暫定憲法によって民族語使用の促進が保障されているように、今後こうした動きの活発化が期待されているが、現時点では民族語の表記された出版物はほぼ聖書やカテキズム、識字教育用教科書等に限られる。

3. 3. 2. アラビア語変種のラテン文字表記の発達と普及

民族語の正書法は言語学者らによって設計され、政府主導で上から与えられたものであったのに対し、（南部）スーダンにおけるアラビア語変種の表記はやや異なる発達過程を経たようである。レジャフ言語会議では6つのグループ言語に加え、「いずれの民族語も実用的でない共同体においては、ラテン文字表記による口語アラビア語も必要とされる」と述べられており（Tucker 1934: 31）、この方針に従った出版物が存在する可能性がある³³⁾。このように植民地政府によりアラビア語のラテン文字表記が導入されたことはスーダン言語政策史上極めて例外的であり、北部からの「イスラーム化」に抵抗する道具³⁴⁾として、アラビア文字を廃し、ラテン文字を導入する意図があった可能性がある（Abū Bakr 1975: 13）。

Miller (2009) は、自らの調査によりキリスト教ミショナリーによって出版されたラテン文字アラビア語文献①～③を収集し、南部スーダンにおけるアラビア語のラテン文字表記の拡大に、キリスト教教会が中心的役割を果たしていたと主張している。

- ① *Kitab el aual li ta'lim el geraia Ua'l kitaba. & Kitab el geraia el jez-il ula*. Wau: Catholic Mission Printing Press, 1929.
- ② *Kitaab al Vahd aj Jadiid*. Holmes Beach: The Bible Alliance Mission, 1978.
- ③ *Taratil: Hymns in Southern Sudanese Arabic*. Juba: Africa Inland Church, 1979.

32) ただし、民族語歌謡のカセットテープ・カバー等にはアラビア文字表記が見られることはある。

33) ヌバ政策に関しても、1930年には植民地政府教育・厚生省長官が「（ヌバ山地において）唯一共通語として使用可能な言語はアラビア語であり、小学校でラテン文字によるアラビア語を科目として教えるべきである」とのメモランダムを残している（Salih 1990: 431）。また、かつて British CMS (Church Missionary Society) はスーダン北部やヌバ山地の CMS 系学校においてラテン文字表記によるアラビア語を教えており、わずかながら 1935 年にその表記によって書かれた手稿が残るが、結果的にこの計画は失敗したことが知られている（Sharkey 2002: 65-72, 飛内悠子氏からのコメント）。これらの事例はレジャフ言語会議との関連性が疑われる。

34) 実際にアラビア語、とりわけ口語アラビア語諸方言は、アラビア文字の成立以降、アラビア文字以外の様々な文字体系を用いて表記されてきた歴史をもつ。ヘブライ文字やシリア文字（Garshuni）によって表記された中期アラビア語（Middle Arabic）はその端的な例と目されるが、その他にもコプト文字によるアラビア語カイロ方言の表記や、ラテン文字によるマルタ語の表記等を挙げる事ができる。これらの例はいずれも特定の宗教（それぞれユダヤ教、シリア聖教、コプト教、カトリック）との関係が深く、南部スーダンにおけるアラビア語変種のラテン文字表記はこれに比せられる。

①は詳細不明の識字教科書である(筆者未見)が、当文献は上記のレジャフ言語会議で提出された方針を受けて作成された可能性が高い。当文献には基本的に標準アラビア語が記述されているが、名詞類の格変化は存在せず、g が g と転写されている点等、スーダン方言の特徴が反映されている。また、当文献の正書法は強調子音等を表す下点 (t [t], h [h])、音節初頭の /s/ を表す鋭アクセント記号 (ā [ʕa]) 等の特殊記号を含む点や /w/, /y/ の表記 (aual 「第一の (K.A. 'awwal)」 geraia 「読字 (K.A. gi'rāya)」) が独特である。

②はアラビア語スーダン方言 (ハルツーム方言か) 訳新約聖書である。スーダン方言聖書の作成について記述している Persson (1997: 17-18) によれば、この新訳聖書は標準アラビア語およびアラビア文字の知識をもたない南部人に向けて作成されたものであったが、南部で話されるアラビア語変種ではなく、南部人自身による抵抗感があったため普及には至らなかった³⁵⁾。このテキストの正書法には①と同様に特殊記号が用いられており、特に /s/ の転写に v が使用されている点 (vahd 「契約 (K.A. 'ṣahd)」) は独特である。

このように、近代スーダンにおけるアラビア語変種のラテン文字による表記はミッシヨナリー系の団体によってわずかながら行われていたことが確認できる。しかし、近年発達しつつある JA の表記は①や②のように特殊文字を使用しないものである。

③は讃美歌集であり、KA と JA の中間的なアラビア語変種による歌詞が、特殊文字を使用しないラテン文字により記録されている(筆者未見)。Miller は③ Africa Inland Church; AIC (1979) の讃美歌 3 首を引用しているが、うち 2 首は Scripture Union; SU (1998) にほぼ同じ讃美歌が収録されている。これらを比較すると、SU (1998) の表記は改変されており、プロソディを表記する重母音表記がみられることから、Watson & Ola (1985) や Smith & Ama (1985) の正書法を参照したものだと推測できる(下線部は筆者)³⁶⁾。

(11) Scripture Union 1998: 17	Africa Inland Church 1979 (Miller 2009:395)
'Nashkur 'laah fii al yom de,	Nashkur, 'llah fi alyom da
Yom kebiir le'na kulu'na,	Yom <u>Kebir</u> lena kuluna
Yesu gum min bein <u>amwaat</u> ,	Yesu gam min bein <u>amwat</u> ,
Arfa sootkum fok wa guna, <u>aleluuya</u> !	Arfa iskum fog wa guna <u>haleluya</u> !

1 行目: この日、我らは神に感謝しよう

2 行目: 我ら全てにとって重要な日

3 行目: イエスは死から立ち上がった

4 行目: 汝らの声を高く上げ歌え、ハレルヤ!

AIC (1979) は特殊文字を使用していない点で、上記の①および②の文献とは明らかに異なる。また、(11) のテキストに見られるように、sh /s/ のような表記 (Nashkur 「我々は感謝する」) から、JA 正書法の前段階と位置づけられる可能性がある。

筆者の所持する SU (1998) は第3版であるが、2008年の第3刷までに計41000部が印

35) 1983年、JA訳の新訳聖書もハルツームで作成されたが、第二次内戦勃発のためジュバに輸送することができなかったため、現在まで正式なJA訳聖書は存在しない(Persson 1997: 24)。

36) ただし、曖昧性回避のハイフンは見られない。JA訳ヨハネ福音書 Revival Movement Association, undated の表記もこれに同じく、基本的に重母音表記のみが観察される

刷されており、JA の表記された出版物としては最も普及しているものである。実際に、筆者の調査によってジュバ市内の AIC テネット教会ではこの文献に収録されている讃美歌が出席者によって合唱されていることが確認できた。これらの事例から、現在行われている JA 話者による JA の表記はこうした出版物を参考にして発達しているが、話者自身にとって重母音によってプロソディを表記することに違和感がある、または困難であるため、そうした表記を省略していると推測できる。

4. まとめ

本稿では、JA の社会言語学的性質について ①言語政策との関わり、②現在の動態的展開、③その一環としてのラテン文字表記習慣の発達の 3 点について概説し、現在までの JA に関する諸先行研究を総合的な枠組みの中に位置づけた。

まず、2.1. ではスーダンにおける言語政策史を参照し、JA は法の上で中心的な役割を担ってきた言語ではなく、その他のアラビア語スーダン諸方言と同様、あくまで非公式の言語として、言語政策史上ほぼ常に無視されてきた対象であったことを確認した。2.2. では関連するアラビア語ピジン・クレオール諸語の最新の研究状況を参照し、そうした研究の中での JA の位置づけを確認した。2.3. では、現在 JA は大きな話者人口（筆者の推定で数百万人）および公共的・文化的な社会機能を獲得しており、話者の国内避難民化／難民化やジュバ市の都市化等の結果、コミュニティごとに言語構造が変化しつつあることを述べた。

3.1.-3.2.1. では、筆者の調査による JA の音韻記述との比較から、1980 年代以降の出版物に於いて定義・使用されている JA の正書法について検討した。3.2.2.-3.2.3. では JA 話者自身によって書かれた具体的な JA テキストと上記の正書法を比較することにより、正書法で定義されているプロソディ表記および曖昧性回避のハイフンが省略される傾向が強いこと、書き手によって安定性および正確さが異なることを示した。3.3. では、Miller (2009) を参照し、近代スーダンにおいて行われてきたアラビア語変種のラテン文字表記を上記の JA の正書法と比較しつつ、それらの歴史的関係について検討した。

以上の過程で、JA 話者人口の推定や、現在のラテン文字表記の分析に、スーダン国外（特にオーストラリア等）で出版された研究・出版物を参照した点は本稿の特色である。従来、JA は「南部スーダンの言語」として研究が進められて来た経緯があるが、筆者は 2.3. で述べたカクマにおける「難民キャンプ語」等を含め、「南部スーダン『難民』の言語」としての JA の側面は、今後重要視されるべき研究課題であると考えられる。

参考文献

- Abū Bakr, Yūsuf al-Khalīfa. 1975. "Language and Education in the Southern Sudan". In H. Bell & S. H. Hurreiz (eds.) *Directions in Sudanese Linguistics and Folklore*. Khartoum: Khartoum University Press. pp. 13–18.
- Abu-Manga, Al-Amin. 2009. "Sudan". In Kees Versteegh a.o. (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Vol. IV. Leiden: Brill. pp. 375–381.
- Avram, Andrei A. 2010. "An Outline of Romanian Pidgin Arabic". *Journal of Language Contact*, VARIA. 3: 20–38.
- Bakker, Peter. 2008. "Pidgins versus Creoles and Pidgincreoles". In Silvia Kouwenberg & John Victor Singler (eds.) *The Handbook of Pidgin and Creole Studies*. Malden, MA: Wiley-Blackwell. pp. 130–157.
- Bizri, Fida. 2005. "Le Pidgin Madam, un nouveau pidgin arabe". *La Linguistique*. 41 (2): 53–66.
- Boone, Douglas & Rechard L. Watson. (eds.) 1996. *Moru-Ma'di Survey Report*. Nairobi: SIL.
- Borland, Helen & Charles Mphande. 2006. *The Number of Speakers of African Languages Emerging in Victoria*. (Report to Victorian Office of Multilingual Affairs, Department for Victorian Communities) Melbourne: Victoria University.
- Bureng, G. Vincent. 1986. "Juba Arabic from a Bari Perspective". In G. J. Dimmendaal (ed.) *Current Approaches to African Linguistics*. Vol. III. Dordrecht: Foris. pp. 71–78.
- Calvani, Daniele. 2003. *Initial Overview of the Linguistic Diversity of Refugee Communities in Cairo*. (Working Paper No. 4) Cairo: The American University in Cairo.
- Centrelink 2008. "People and Places: Sudan". *The Journey*. 16: 5–7.
- Collins, Robert O. 1975. *The Southern Sudan in Historical Perspective*. Tel Aviv: Shiloah Center.
- Cortini, Riccardo. 1994. "Pidgins arabi nella letteratura italiana del cinquecento?". *Quaderni di Studi Arabi*. 12: 65–86.
- Crewe, W. J. 1973. *The Place of Sudanese Arabic: A Study in Comparative Arabic Dialectology*. (African and Asian Studies Seminar Series No. 20) Khartoum: University of Khartoum.
- DeCamp, D. 1977. "The Development of Pidgin and Creole Studies". In Albert Valdman (ed.) *Pidgin and creole linguistics*. Indiana University Press. pp. 3–20.
- Elhanan-Granik, Ayelet. 2001. *Israeli Foreigner Talk: Employers' Verbal Communication with Guest Workers from Romania and Thailand*. Bar-Ilan University: M.A. thesis.
- Ferguson, C. A. 1972. "The role of Arabic in Ethiopia: a sociolinguistic perspective". In J. B. Pride & J. Holmes (eds.) *Sociolinguistics*. Middlesex: Penguin Books. pp. 112–124.
- Heine, Bernd. 1982. *The Nubi language of Kibera: an Arabic creole*. (Language and dialect atlas of Kenya Vol. III) Berlin: Dietrich Reimer.
- Jenkins, E. V. 1908/9. *An English-Arabic Vocabulary with Grammar & Phrases* (Representing the Language as Spoken by the Uganda Sudanese in Uganda and British East Africa Protectorates). Kampala: The Uganda Company.
- Jernudd, Björn. 1979. *The Language Survey of Sudan. The First Phase: A Questionnaire Survey in Schools*. Umeå: Umeå Universitetsbibliotek.
- Johnson, Douglas H. 1989. "The Structure of a Legacy: Military Slavery in Northeast Africa". *Ethnohistory*. 36 (1): 72–88.

- Kaye, A. S. & Mauro Tosco. 1993. "Early East African Pidgin Arabic". *Sprache und Geschichte in Afrika*. 14: 269–305.
- Luffin, Xavier. 2007. "Pidgin Arabic: Bongor Arabic". In Kees Versteegh a.o. (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Vol. III. Leiden: Brill. pp. 634–639.
- Mahmud, Ushari. 1979. *Variation in the aspectual system of Juba Arabic*. Georgetown University: Ph.D. thesis.
- Mahmud, Ushari. 1983. *Arabic in the Southern Sudan: History and the Spread of a Pidgin-Creole*. Khartoum: FAL Advertising and Print. Co.
- Manfredi, Stefano. 2005. *Descrizione grammaticale dell'Arabo Juba (Sudan Meridionale) con riferimenti sociolinguistici alla comunità Sudanese del Cairo*. Università degli Studi di Napoli "L'Orientale": M.A. thesis.
- Miller, Catherine. 2003. "Juba Arabic as a way of expressing a southern Sudanese identity in Khartoum". In Abderrahim Youssi a.o. (eds.) *Aspects of the dialects of Arabic today*. (Proceedings of the 4th Conference of AIDA) pp. 114–122.
- Miller, Catherine. 2004. "Un Parler 'Argotique' à Juba, Sud Sudan". In Dominique Caubet a.o. (eds.) *Sociolinguistique urbaine: Parlers Jeunes Ici et la-bas*. Paris: Harmattan. pp. 69–90.
- Miller, Catherine. 2006. "Juba Arabic". In Kees Versteegh a.o. (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Vol. II. Leiden: Brill. pp. 517–525.
- Miller, Catherine. 2007. "Do They Speak the Same Language? Language Use in Juba Local Courts". In Everhard Ditters & Harald Motzki (eds.) *Approaches to Arabic Linguistics*. Leiden: Brill. pp. 607–638.
- Miller, Catherine. 2009. "Southern Sudanese Arabic and the Churches". *Revue Roumaine de Linguistique*. LIV (3-4): 383–400.
- Miller, Catherine & Al-Amin Abu-Manga. 1992. *Language Change and National Integration: Rural Migrants in Khartoum*. Khartoum: Khartoum University Press.
- Mugaddam, Abdel Rahim Hamid. 2006. "Language Maintenance and Shift in Sudan: the Case of Migrant Ethnic Groups in Khartoum". *International Journal of Sociology of Language*. 181: 123–136.
- Mühlhäusler, Peter. 1986. *Pidgin and Creole Linguistics*. Oxford: Blackwell.
- Murray, Cristina & Maywald Catherine. 2006. "Subnational Constitution-Making in Southern Sudan". *Rutgers Law Journal*. 37: 1203–1234.
- Nadel, Siegfried. 1947. *The Nuba: an Anthropological Study of the Hill Tribes in Kordofan*. London: Oxford University Press.
- Næss, Unn Gyda. 2008. "Gulf Pidgin Arabic": *Individual Strategies or a Structured Variety? A Study of Some Features of the Linguistic Behaviour of Asian migrants in the Gulf Countries*. University of Oslo, Department of Culture Studies and Oriental Languages: M.A. thesis.
- Nhial, A. J. 1975. "Ki-Nubi and Juba-Arabic: a Comparative Study". In H. Bell & S. H. Hurreiz (eds.) *Directions in Sudanese linguistics and folklore*. Khartoum: Khartoum University Press. pp. 81–93.

- Ohta, Itaru. 2005. "Multiple Socio-Economic Relationships Improvised between the Turkana and Refugees in Kakuma Area, Northwestern Kenya". In Itaru Ohta & Yntiso D. Gebre (eds.) *Displacement Risks in Africa: Refugees, Resettlers and Their Host Population*. Kyoto: Kyoto University Press. pp. 315–337.
- Owens, Jonathan. 1977. *Aspects of Nubi Grammar*. London University: Ph.D. thesis.
- Owens, Jonathan. 1997. "Arabic-Based Pidgins and Creoles". In Sarah Tomason (ed.) *Contact Languages: A Wider Perspective*. Amsterdam: J. Benjamins. pp. 125–172.
- Persson, Janet. 1997. *In Our Own Languages: The Story of Bible Translation in Sudan*. (Faith in Sudan No. 3) Nairobi: Paulines.
- Qasim, 'Awn al-Sharif. 1975. "Sudanese Colloquial Arabic in Social and Historical Perspective". In H. Bell & S. H. Hurreiz (eds.) *Directions in Sudanese Linguistics and Folklore*. Khartoum: Khartoum University Press. pp. 94–101.
- Revival Movement Association. undated. *Yoaane: Saba Teriiga bita Arufu Rabuna*. Belfast.
- Roth, Arlette. 1979. *Esquisse grammaticale du parler arabe d'Abbéché*. Paris: Geuthner.
- Salih, Kamal Osman. 1990. "British Policy and the Accentuation of Inter-Ethnic Divisions: The Case of the Nuba Mountains Region of Sudan, 1920–1940". *African Affaires*. 89 (356): 417–436.
- Scripture Union. 1998. *Shukuru Yesu*. Nairobi: Sudan Literature Centre.
- Sharkey, Heather J. 2002. "Christians among Muslims: The Church Missionary Society in the Northern Sudan". *The Journal of African History*. 43 (1): 51–75.
- Siddiek, Ahmed Gumaa. 2010. "Language Situation in Post-War Sudan". *International Education Studies*. 3 (3): 79–87.
- SIL; Summer Institute of Linguistics. 2007. *SIL Vernacular Book List*. [unpublished]
- Simeone-Snelle, Marie-Claude. 2007. "Horn of Africa". In Versteegh a.o. (eds.) *The Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Vol. II. Leiden: Brill. pp. 268–275.
- Smart, J. R. 1990. "Pidginization in Gulf Arabic: A First Report". *Anthropological Linguistics*. 32: 83–119.
- Smith, Ian & Morris Timothy Ama. 1985. *A Dictionary of Juba Arabic & English, Kitaab ta Arabi Juba wa Ingliizi*. Juba: The Committee of The Juba Cheshire Home and Centre for Handicapped Children.
- Smith, Ian & Morris Timothy Ama. 2005. *Juba Arabic - English Dictionary: Kamuus ta Arabi Juba wa Ingliizi*. Kampala: Fountain Publishers.
- Thomason, S. & A. Elgibali. 1986. "Before the Lingua-Franca: Pidginized Arabic in the Eleventh Century A.D.". *Lingua*. 68: 317–349.
- Thorburn, D. H. 1925. "Sudanese Soldiers' Songs". *Journal of the Royal African Society*. 24 (96): 314–321.
- Tosco, Mauro & Jonathan Owens 1993. "Turku: A Descriptive and Comparative Study". *Sprache und Geschichte in Afrika*. 14: 177–267.
- Tucker, A. N. 1934. "The Linguistic Situation in the Southern Sudan". *Africa*. 7: 28–36.
- Tucker, A. N. 1971. "Orthographic Systems and Conventions in Sub-Saharan Africa". In Sebeok, Thomas A. (ed.) *Linguistics in Sub-Saharan Africa*. (Current Trends in Linguistics. Vol. 7.) The Hague & Paris: Mouton. pp. 618–653.

- Versteegh, Kees. 1984. *Pidginization and Creolization: The Case of Arabic*. (Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science, Series IV: Current issues in Linguistic Theory. Vol. 33) Amsterdam: John Benjamins.
- Versteegh, Kees. 1993. "Leveling in the Sudan: from Arabic Creole to Arabic Dialect". *International Journal of the Sociology of Language*. 99: 65–79.
- Versteegh, Kees. 2001. "Arabic in Madagascar". *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. 64 (2): 177–187.
- Watson, Richard L. & Louis Biajo Ola. 1985 / 2007(2nd ed.) *Juba Arabic for beginners*. Nairobi: Summer Institute of Linguistics.
- Wellens, Inneke. 2003. *An Arabic creole in Africa: The Nubi language of Uganda*. University of Nijmegen: Ph.D. thesis.
- أبومنفعة, الأمين محمد ويوسف الخليفة أبوبكر ٢٠٠٦ أوضاع اللغة في السودان . الخرطوم : مطبعة جامعة الخرطوم .
شول, بول دينق ٢٠٠٥ لهجة جوبا العربية . الخرطوم : الدار السودانية للكتب .
- 阿部優子. 2006. 「アフリカ諸語・スワヒリ語の正書法とベンデ語表記法試案」 塩原朝子・児玉茂昭編『表記の習慣のない言語の表記』アジア・アフリカ言語文化研究所 . pp. 243–271.
- 栗本英世. 2002. 「英語、アラビア語、ジュバ・アラビア語—スーダンにおける言語、教育、政治、アイデンティティ—」 宮本正興・松田素二編『現代アフリカの社会変動ことばと文化の動態観察』人文書院 . pp. 74–92.
- 高階美行. 1988. 「アラビア語のピジン・クレオール」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』第1巻 . 三省堂 . pp. 483–487.
- 千田俊太郎. 2006. 「ドク・ピシンの表記に関する考察」 塩原朝子・児玉茂昭編『表記の習慣のない言語の表記』アジア・アフリカ言語文化研究所 . pp. 273–301.
- 飛内悠子. 2009. 「ハルツーム在住国内避難民の現在 聖公会の活動を通して見るクク人のことば」『多言語社会研究会年報』5: 25–55.
- 豊田由貴夫. 2000. 「メラネシア・ピジンと植民地主義」 吉岡政徳・林勲男『オセアニア近代史の人類学的研究—接触と変貌, 住民と国家—』(国立民族学博物館研究報告別冊 21 号) 国立民族学博物館 . pp. 151–173.
- 仲尾周一郎. 2010. 「ジュバ・アラビア語によるパリ民族の民話」『地球研言語記述論集』2: 39–72.
- 中野暁雄. 1988. 「アラビア語諸方言」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第1巻 . 三省堂 . pp. 472–483.

参考ウェブサイト

- Lewis 2009. *Ethnologue* (web version) <http://www.ethnologue.com/> (2010, 12/13)
- Wikipedia. "Southern Sudan" http://en.wikipedia.org/wiki/Southern_Sudan (2010, 12/13)